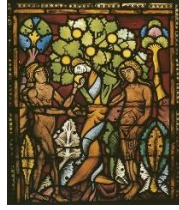


# 「悪魔、誘惑人、サタンと神様の偉大さ」

創世記2章7-9、16-17、3章1-7



兄弟姉妹の皆さま

まだまだ寒いとはいえ、少しずつ暖かくなり春めいてきています。お元気にお過ごしですか。神様とともにいたいと祈る皆さまのために、神様と出会っていない皆様のためにも、いつもお祈りしています。

今回は創世記2章7節-9節と3章1節-7節を、皆様と共に黙想するため、お話をさせていただきます。

聖書のこの部分には、人間の弱さや虚しさが描かれています。創世記2章7-9の最初に、神はただの土から人間を作られた、と書かれています。神ご自身の御手の業により人間の形が造られ、神ご自身の息吹によって、その塵は生きる者になりました。真の命の源である神との触れ合いに守られ、神によって生きるならば、人間は信仰を強めることができるのです。人間はいくら弱くても、神と同じ息を持つことになり、園の中に幸せに暮らせる場所も用意してくださったに違いありません。しかし、残念ながら、人の言葉で話せるサタンの誘いに従ってしまった人間は、結局神から離れてしまいました。

主なる神は人に命じて言われた。「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」(創世記2章16-17)

この話はすでに耳慣れていることと思います。皆さんは、人間が神様と同じように善悪を知ることになり、神様と同じ身分だと考えるようになったことが、人間の罪の原因だと思うかもしれませんが、しかし、これについてはゆっくり考えて解釈する必要があります。人間が何でも知りたいということは傲慢だとか罪だ、と早まって判断するのは止めましょう。何でも知りたいということは悪いことではありません。むしろ、人間に与えられた賜物の一つです。人間の重要な特徴ともいえます。人間が神様から離れてしまった原因は、神様と同じ息吹(命)を守ることができなかったことにあります。神様から頂いた命を大切にしなかったのです。だから、人間は罪に陥ってしまったのです。

四旬節にあたり、神様がお与えになった命、自分の命だけではなく、すべての命を大切にしましょう。自分自身に立ち返る、自分の命の源に戻りましょう。そこから命を守るために新しい力を得て、私達一人一人の人生を歩み続けましょう。神様からの豊かな恵みが皆様の上に豊かに注がれますように、お祈りと祝福をお贈りいたします。

父と子と聖霊のみ名によって。アーメン。

2023年3月

カトリック上野毛教会 主任司祭

ペトルス・ウィリー・ソバ・ドイ O.C.D.